

2016. 9. 21 (水)

言葉のパワー

Ruth M. Grubel

今日から秋学期の授業が始まりましたが、早速、チャペルでは「言^{コトバ}」というテーマをみんなで考えたいと思います。

武器としての言葉

「言^{コトバ}」のテーマをいただいて私が最初に思ったことがあります。小学生のときに、はやっていた諺ですけれども、英語で分かるでしょうか：

Sticks and stones may break my bones, but words will never hurt me.

「棒や石は骨を折るかもしれないが、言葉は少しも傷つけない」という意味です。だから、子どものときは、そうだと思ってしまいました。実際に言葉のせいで人が骨を折ったりすることはないでしょう。

しかし、大人になって、この諺の意味を考え直すようになりました。言葉はとても危ないパワーも持っているのではないのでしょうか。一番典型的な例は、満席の映画館で人が「火事！」と叫ぶと、どのようになるのでしょうか。本当に火事ではなくても、その一言で人々が慌てて、逃げようとするでしょう。けがをする人たちも多いかもしれません。言葉

は人々に大きな影響を与えることができるのです。

最近、「ヘイトスピーチ」と呼ばれる言葉が注目されています。これは社会的な問題で、ある人種、国籍やアイデンティティを持つ人々に対して悪口を言う事によって、差別されている人に精神的な暴力や弾圧を与える結果になります。

また、以前から話題になっていたいじめの問題も、言葉によって発生しています。意地悪な言葉を言ったり、書いたり、そして、携帯で送ったりすることによって、人々が悲しみ、人生がとても辛くなり、ある人たちは自殺してしまう場合があります。そのようなことを考えたら、言葉は骨折ではなくても人を傷つける悪い影響を与える可能性があることがわかります。

マイクロ・アグレッション

先月、アメリカ、西海岸のワシントン州にあるシアトルでアメリカ社会学会の総会が行われて、私も参加することができました。そこで聞いた幾つかの発表の中で使われたある言葉を紹介したいです。日本の社会学でも使われているかもしれませんが、私の辞書には載っていませんでした。英語では「micro-

aggression (マイクロ・アグレッション)」と言います。

マイクロ・アグレッションとは、特に差別的な意味がないと思っても、ある小さな行為や言葉が繰り返される事によって攻撃的な影響を与える現象です。これは1970年代にハーバード大学の心理学者が先に使った言葉ですけれども、そこから発展して、今は社会学や心理学の中では広く取り上げられて、大勢の人たちがそれに関連する研究をしています。

マイクロ・アグレッションが最初に提唱された理由は、アメリカは多文化共生と言っている社会なのに、特にアフリカ系アメリカ人はいろいろな場所で、あらゆるときに、マイクロ・アグレッションを受けていることが様々な調査の結果から明らかになったからです。また、女性や障がいのある人たち、宗教が違う人たち、社会的に弱い立場にいる人たちに対して、マジョリティの人たちが何となく言ってしまい、「何が悪いの、私はそんな悪い意味で言ったのではない。」という言い訳をしても、傷つける結果を起こした状況を分析する研究も発展してきました。

例えば、アメリカにはメキシコなどのラテンアメリカから来た移民たちも多いですが、アメリカで生まれ育ったヒスパニック系の人たちが大勢います。その人たちに白人の人が、「あなたの英語はすごく上手ですね。」と言うことがあります。アメリカで生まれ育って、ずっと住んでいるのだから当たり前のはずなのに、顔が違うだけで、そのようなことを言われ、「本当のアメリカ人」ではない、と受け取ってしまいます。

他の例では、言葉ではありませんが、黒人の方が店に入ったら、店員がその人をずっと

観察する事があります。白人よりもアフリカ系アメリカ人の方が万引きをする可能性が高いというステレオタイプによって、そのようなマイクロ・アグレッションを経験するわけです。

インターネットで調べると、日本にもマイクロ・アグレッションの例があるようです。

私が目にした記事を書いた白人は、日本に長い間住んでいた人です。最初に来日した時はある程度の日本語を使う事ができたら、出会う日本人と意見交換や意味のある会話ができてと思っていたそうです。しかし、毎日言われることや、話し掛けられる質問では同じようなことしか聞かれなかったので、いつまでも外国人扱いしかしてもらえないと言いました。

例えば、どこかで和食を食べていたら、「箸使いが上手ですね」と言われます。もしくは、「納豆は好きですか？」と聞かれるそうです。私もよく聞かれますけれども、「好きです。」と答えたら、「すごい！」と言われます。もしかしたら、関西だからかもしれないが…。

はっきり言って、私は別に気にしたことがありませんが、この人は毎日のように同じことを聞かれて、お箸が使える、納豆が好きな外国人というレベルのイメージしか伝わらず、社会の中でもっと深い人間的な意味で受け入れてもらいたいと著者は解説していました。

それは少し極端な例かもしれませんが、いろいろなマイノリティの人たちが私たちの社会の中にいますのでアンテナを張って、使う言葉に気をつけることは大切でしょう。

しかし、マイクロ・アグレッション理論に対して問題意識を持っている人たちも、社会

学者の中にいます。小さな行いや言葉遣いを強く意識してしまうと、あまりにも考えすぎて、きちんとした会話ができなくなってしまう。「何を言ったら傷つけない」か、「このようなことを言ったら傷つけるかもしれない」と、あまりにも心配しすぎてカンパセーションができなくなってしまうという問題が指摘されています。あるいは、受ける方は、あまりにも被害者意識を持ってしまい、何を言ってもマイクロ・アグレッションだと解釈してしまうという悪循環が起る可能性があります。確かにそれも考えられますけれども、今日は皆さまにマイクロ・アグレッションという概念を紹介して、出来るだけ相手の気持ちや考慮する大切さを知っていただきたいです。

聖書のアドバイス

そこで、今日の聖書の箇所をもう一度見たいと思います。打樋先生にエフェソの信徒への手紙、4章9節を読んでいただきました：「悪い言葉を一切口にしてはなりません。ただ、聞く人に恵が与えられるように、その人を作り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい。」

すなわち、私たちの言葉はすごいパワーを持っています。相手を傷つけることだけではなく、相手に勇気、励まし、そして恵みを与えるというパワーもあります。それを理解して、できるだけ私たちの言葉を相手の支えになるように努力しませんか？「今日は同僚が悲しそうだけれども、少しでも明るくするた

めに何を言ったらいいのかが。」これは私たちの大事な役割かもしれません。

最後にもう一つ、言葉に対して皆さまにお伝えしたかったのは、社会学部の聖句のことです。ヨハネによる福音書の8章32節にある「真理はあなたたちを自由にする」の言葉はこのチャペルの壁にも掛かっていますが、その前の31節から読むと、「イエスは御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。『私の言葉にとどまるならば、あなたたちは本当に私の弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。』と書いてあります。すなわち、イエスの言葉は私たちを自由へと導きますし、それによって、イエスの生き方に倣うことができるのです。

私たちが相手をどのように励ますかということ、エンパシーを通してその人の立場から考えてみることです。私たちはエンパシーを育てるために、社会学部の勉強や、いろいろな付き合いを通じて、相手の思いや悩みを知り、その人の目と耳から私たちの使う言葉を考えてみたらどうでしょうか。

今行われているアメリカ大統領の選挙運動では言葉が乱暴に使われています。世間では真理の存在が薄くなってしまい、本当に悲しいですけれども、私たちはその道を選ばなくても良いのです。私たちの言葉がどのように真理を表して、相手を励まし、神様の恵みをどのように表すかを考えて実践して行こうではないでしょうか。

(社会学部教授、宣教師)